

アンケート結果に見る図画工作教育法の成果と課題

長尾 寛子*

An analysis of questionnaire results of “Teaching Methods for Arts and Crafts in Elementary School”

NAGAO Hiroko

要 約

本稿では図画工作教育法の受講生に対するアンケート結果を分析し、体験型授業の成果を示すとともに、その課題を明らかにする。

キーワード：図画工作教育法、美術教育、絵画、体験型授業

1. はじめに

小学校の教員となる学生は、「図画工作」の授業を担当するために、図画工作教育法の講義を受講する。この講義では多くの内容を受講し、それらを小学校で教えなければならない学生たちに、小学校で図画工作を教える意義を理解させる必要がある。また彼らの全員が美術に関連する職業を志したり、美術に関心を持っているわけではないために、中には実技を苦手を感じる学生が存在する。教室では教師自身が楽しさを感じながら子ども達に教えることが効果的なので、このような苦手意識はその障害となる可能性がある。将来学生たちが教員として児童にとって魅力的な授業を行うためには、これらの点を改善していくことが重要なこととなる。

本稿は2019年度に行った図画工作教育法の講義を受講した学生93名に対するアンケート調査をもとに分析し、図画工作を小学校で教えることが重要であることを学生に理解させる仕方、および学生が

図画工作にどのような点で苦手意識を持つかを明らかにする。それによって今後の図画工作教育法の改善点を示す。なおアンケートの公表については、アンケート用紙に公表することを明記するとともに、アンケート開始前に口頭でも説明し学生からの同意を得ている。

2. 図画工作教育法の授業について

まず本章では、15回の授業内容についてその概略を示す。授業では図画工作の基本的な考え方を教えたのち、学習指導要領の説明を行い、ビデオ教材を使って授業の具体的なイメージを持たせた。これらの準備を行ったうえで、受講生が能動的に参加できるように、制作やワークショップを授業に組み込み、それぞれの授業内容を理解させながら、必要な技術を体験を通して身に付けさせるように工夫した。また最後に模擬授業と学生たち自身による相互の評価を行わせ、実際に授業ができるところまでの知識と技術と実践力を得られるようにした。

* 中部大学現代教育学部現代教育学科

〈第1回〉

【学生の活動】本授業の目標や15回の授業の流れを理解する。美術教育の目指すところを理解し、人間にとっての美術の重要性について考える。

【解説】図画工作教育法は、図画工作の授業を担当できる力を修得することをねらいとした授業である。美術教育の基本的な考え方には「美術の教育」と「美術を通しての教育」という2つの考え方があり、それらの違いとそれぞれの重要性について説明した。さらに美術の歴史や人間と美術のかかわりについて講義した。その後図画工作に興味を持たせ、「美術の教育」と「美術を通しての教育」についての理解を深めさせるために、映画《トントンゴキゴキ図工の時間》(映画監督/野中真理子)の一部を鑑賞させた。

〈第2回〉

【学生の活動】『小学校学習指導要領解説図画工作編』の骨子を理解する。イメージを湧かせる方法について考察する。「造形遊び」について理解する。

【解説】『小学校学習指導要領解説図画工作編』をもとに、図画工作の目標と内容について説明した。特に本授業では、図画工作の内容の一つである「造形遊び」について詳しく解説した。また描いたり作ったり、造形にかかわる「遊び」を行う時のイメージの湧かせ方に多様性があることを解説した。その際子どもの造形遊びの写真を見せ、学生自らが考えるように工夫した。その後ワークショップとして「新聞紙で長い道をつくる」をテーマに、実際に造形遊びに取り組ませた。新聞紙は図画工作でよく使用される材料の一つであり、「切る」「裂く」「曲げる」「組む」「燃る」「しわをよせる」「穴をあける」「編む」「組む」「結ぶ」など、多くの加工方法がある。造形遊びは作品の完成を目指すものではなく、素材や空間とかかわりながら、自由な発想を大切に造形活動をするものである。そこでは自主性と活動の過程こそが重要となる。学生たちはグループのメンバーと相談しながら、加工方法を見つけ出し、造形遊びを楽しんでいた。

〈第3回〉

【学生の活動】「絵や立体」の「絵」を描く活動につ

いて深く理解し、絵で表現することの楽しさについて考える。ビデオをみて授業のねらいや構成、授業の工夫点などを分析する。

【解説】描いたり立体をつくったりする造形活動は、図画工作にとって重要な活動である。1年生から6年生の児童がどのような絵や立体を生み出すのかを、具体的に作品を見せながら、特に絵を中心に説明した。その際年齢によって使用する材料や用具が変わり、児童の実態とともに、安全を第1に考えながら材料や用具を選択することが大切であることを理解できるように留意した。その後福島県の小学校で行われた、浅野京子先生による図画工作の授業の番組《毛糸の「春」、墨の「きもち」》(NHK)を、記録を取りながら見させた。特に《墨の「きもち」》は、ビー玉やスポンジなど身近なものを使用して、墨で感情を表現するという内容の授業である。いわゆるモダンテクニックを使って、子どもたちは自由に体全体を動かしながら描いている。学生はすでに1年生の図画工作研究でモダンテクニックについて制作をしながら学んでいるため、修得済みのモダンテクニックが実際の授業でどのように展開、活用できるのかを示すためにも有効な番組であった。

〈第4回〉

【学生の活動】「絵や立体」の「立体」をつくる活動の内容を深く理解し、立体で表現することの楽しさについて考える。ビデオをみて、授業のねらいや構成、授業の工夫点などを分析する。

【解説】図画工作で重要な活動である「立体」について解説した。また最近では領域の統合が強調される傾向が強くなっているが、基礎知識として学生にはその違いについて理解してほしいため、「絵画」「立体」「工作(工芸やデザイン)」について、美術教育の歴史を踏まえながらその差異について説明を加えた。その後NHK番組《石に刻め! 自分のこころ》を、記録を取りながら見るように指導した。これは「課外授業・ようこそ先輩」(1998年～2016年)のシリーズの中の番組で、世界的彫刻家である安田侃氏が北海道美唄市の母校の小学校で、石で立体をつくる授業を行ったものである。授業の構成やねらいなどを、観察をとおして考えさせるとともに、特にこの授業から、「表現」することについて理解を深め、

無機質である単なる物質に、心が宿り動き出す瞬間があるということをこの授業で知らせようとした。

〈第5回〉

【学生の活動】針金を使用した立体作品を制作する。制作をとおしてつくる楽しさを実感する。針金の加工方法や素材の種類、特徴を知る。ペンチなどの用具の使用方法を修得する。制作しながら表現にいたるプロセスについて考える。

【解説】課題は「中部大学に生息する生き物」である。針金はアルミ線（7色、各色1.5mmと2.5mm）と鉄線（銀色、1.5mmと2.5mm）を準備した。制作の1回目は、材料と用具、加工方法について説明した。特に針金の先が鋭利でケガをする可能性があり、安全面の指導が重要であることを強調した。

〈第6回〉

【学生の活動】立体作品を引き続き制作し、完成させる。

【解説】前回学んだことを活用して、自分の思いがこもった作品を制作させた。今回の制作では主にアルミ線を使用しているが、図画工作では身近なものから材料を見つけ出すことも大切であるため、表現に適した素材を自由に選び、アルミ線に加えて使用しながら制作することにした。学生は葉っぱ、枝、折り紙、ペットボトルのキャップ、ボタン、綿、粘土など、さまざまな素材を選び作品に活用していた。

〈第7回〉

【学生の活動】制作した立体作品を鑑賞し合い、自分の作品について言葉で説明したり、友人の作品の良いところを見抜く力をつける。

【解説】鑑賞は表現と同様に重要なものであり、学習指導要領でも積極的に鑑賞の時間を設けるとされている。図画工作では「美術を通しての教育」という点からも、鑑賞は非常に重要である。「生き物について」「表現したかったこと」「工夫した点」「残した課題」「感想」について発表させ、その後作品を自由に鑑賞させるようにした。

〈第8回〉

【学生の活動】「工作」の内容を深く理解し、工作で

表現することの楽しさを味わう。授業ビデオをみて、授業のねらいや構成、授業の工夫点などを分析する。

【解説】図画工作の内容の一つである「工作」について解説した。その後NHK番組「課外授業・ようこそ先輩」シリーズの《デザインは大切な人の為》をみることで、工作についての理解を深めた。この番組では、カーデザイナーの奥山清行氏が、母校の山形大学付属小学校で授業を行っている。授業で奥山氏は、工作は自己表現だけではなく、その根底には自分の思いよりも他者の立場を優先して考え、他者への思いを表現するものであると力説している。その考え方がいわゆる工芸やデザインの重要な考え方であることを学生に理解させるために、このビデオを選んだ。その後、グループごとに「『大切な人のための建物』の設計図を描く」という課題に取り組ませた。

〈第9回〉

【学生の活動】子どもの絵の発達について理解する。

【解説】子どもの発達と絵の表現方法は密接に関係しており、多くの教師や研究者が絵の空間表現や人物表現について探究してきた。図画工作で教える児童は6歳から12歳までで、人間の発達において大きく成長する時期である。そのような児童に絵を指導する教師にとって、絵の表現の発達のプロセスを知ることが大切であり、さらに絵をとおして児童を理解するためにも修得すべき基礎知識である。講義では、実際の子どもの絵を分析しながら説明した。そのあと持参した学生自身が「子どもの時に描いた絵」を実際に分析するよう指導し、理解を深めさせた。

〈第10回〉

【学生の活動】学習指導案作成の方法を修得する。模擬授業のグループを決定し、行う授業の単元を決定する。グループのメンバーの役割分担を決める。

【解説】模擬授業を行うために、学習指導案作成の方法とポイントを説明した。図画工作の特色として、知識や授業計画や教える技術以外にも、教師として身に付ける必要があることがある。それは、材料・用具の使い方を習得すること、描く方法や作る方法、そして何よりも表現したいものを見つけ出し、作品のイメージを明確にする術を育成することである。

それらには明確な正解がない場合が多く、教員が自分の知識と技量、経験をもとに、児童の活動に対応していかなければならない。そのことについても理解するように説明した。

〈第11回〉

【学生の活動】模擬授業の準備をする。

【解説】第10回で「学習指導案の作成」「参考作品の制作」「ワークシートやフラッシュカードなどの作成」「模擬授業の教師」の5つの役割の担当者を決定したので、それぞれの役割に即して準備を行わせた。

〈第12回～第14回〉

【学生の活動】順番に模擬授業を行う。他の学生は児童役として参加し、授業について記録し検討・評価し合う。

【解説】順次グループごとに模擬授業を発表させた。まず「授業のねらい、題目全体の授業の流れ、授業内容」について説明した。次に教師役の学生が模擬授業を行い、その後「参考作品やワークシートなど」について説明した。最後に感想を発表するという手順で行わせた。発表グループ以外の学生には、グループごとの模擬授業について評価、コメントを用紙に記入させた。

〈第15回〉

【学生の活動】色の基礎的知識を修得する。感情を表す色をつくる。

【解説】図画工作で重要な色について理解を深めるために、色相、明度、彩度や色の混色などについて理解させた。さらに色の効果や色と感情のかかわりについて学ばせるために、作品を鑑賞、分析しながら説明した。その後、「味覚を形と色で表現する」というワークショップを行った。

3. 図画工作に対する受講学生の好嫌に関する意識とその変化

(1) アンケート結果

この講義では、図画工作の必要性に対する意識を調査するとともに、講義の効果を確めるために、受

講生93名に対して、講義の事前と事後にアンケートを行った。内容は1図画工作が好きかどうか 2図画工作の授業が必要だと思うかどうか の2点についてである。その集計結果は、以下のとおりである。

(表1)「図画工作は好きですか」の回答

n = 93	事前	事後
好き	42 人	39 人
どちらかといえば好き	28 人	29 人
どちらかといえば嫌い	15 人	14 人
嫌い	7 人	10 人
わからない	1 人	1 人
回答なし	0 人	0 人

(表2)「図画工作の授業は必要と思いますか」の回答

n = 93	事前	事後
必要	57 人	72 人
どちらかというとも必要	22 人	15 人
どちらかというとも不必要	7 人	3 人
不必要	1 人	0 人
わからない	4 人	1 人
回答なし	2 人	2 人

(表1)のように図画工作を好まない学生が全体の2割強と、一定数存在する。これは毎年の授業の際に受ける印象と同様であって、全体の傾向だろうと推測できる。またこの割合は授業の後でも変化が見られない。これに対して(表2)から、図画工作授業の必要性については、必要をあまり感じない学生が当初1割強存在したが、授業後には大きく減少した。必要と考える学生数については、必要性をより強く感じるようになった学生が多く、この点では授業効果が大きいことがわかる。以下では、自由記述の回答を分析して、学生がどのような点から図画工作に対する苦手意識を持っているのか、図画工作授業の意義をどうとらえているのかを分析する。

(2) 図画工作に対する苦手意識の問題

まず「図画工作が好きですか」という質問に対する学生の回答を分析する。なお回答は事前、事後の二回分があるが、これについては二回とも同様の内容だったため、以下では事後アンケートの記述に基づいてまとめている。

「好き」「どちらかといえば好き」と答えた理由

図画工作について「好き」「どちらかといえば好き」と回答した学生が挙げた理由をまとめたものが（表3）である。

「好き」の理由を検討すると、工作やデザインや絵を描くのがもともと得意だったり好きだったことや、制作の授業であるため自分自身が能動的にかかわり、成果を体験できること、制作を通じて他の学生とコミュニケーションすることができることなどが理由となっている。

また「どちらかという好き」の理由をみると、「好き」と回答した学生の記述と重なるものが多いが、制作テーマや素材によっては苦手なものがあること、好きだが時間が足りないため満足できる作品ができないこと、手先が器用でないことなどが、図画工作に対する評価が低い原因となっている。

「嫌い」「どちらかといえば嫌い」と答えた理由

図画工作について「嫌い」「どちらかといえば嫌い」と回答した学生が挙げた理由をまとめたものが（表4）である。

（表4）によると、「嫌い」と答えた理由は、図画工作が苦手であり、そのため思うように制作できないこと、同じ部屋で制作をするため、他の学生の作品と比較して劣等感を感じてしまうことだった。「嫌い」とする理由が苦手意識であったために、授業後のアンケートでも「嫌い」と回答する人数が変化しないこととなった。15コマという限られた時間内で制作を苦手とする学生の能力を高め、自信を持たせることは難しいからである。

(3) 図画工作の必要性について

参加型授業によって学生の苦手意識を払拭することは難しかったが、それに対して図画工作に対する意識を高めることはできたと考えられる。「図画工

作が必要」と答えた理由（表5）と「どちらかといえば必要」と答えた理由（表6）は、以下のようなものである。

事前アンケートでも内容的に以上とほぼ同様の回答だったが、若干表現の異なる以下のような理由があった。（表7）

この結果によれば、多数の受講生が、たんにうまく制作することではなく、創造性、感性などを養い、全人格的な成長に寄与すること、自己表現能力を高めること、自由さを感じることに、児童の発達における造形教育の意義があると理解したことがわかる。またこれらと並び、「楽しさ」を感じたことも、意義を感じた理由となっている。

これらの意見に対して、少数だが意義を見出せない受講生も存在した。その理由は、「図画工作で育成できる力は他教科でも育むことができる」や「今現在、自分の中で図工で学んだことが生きている感じがしないから」といった、固有の意義が今一つわからないという感想と並んで、「同じ思いをする子はいてほしくない」、「時間がない」、「教師の力量に左右されやすい」という、苦手を理由とするものがあった。また今までの学校での授業経験に基づく事前アンケートの回答では、「図画工作で何を学んだかわからない」、「嫌な思い出が多く、才能がない者には良い影響がない」、「絵を描くのが得意、不得意があるため、苦手な子にさせなくて良いと思う」、「才能ある人だけが楽しめる教科だと思う」と、苦手なためにいやな経験をしたことが意義をみいだせない理由となっていた。

4. 絵画に対する苦手意識について

図画工作教育法講義についてのアンケート結果からは、様々な素材を元に、受講生が能動的に参加する体験型の学習によって、造形教育の意義を、身を持って実際に感じさせることができていることがわかる。少数だが図画工作が「嫌い」とする学生が残ったことについては、その理由が図画工作に対する苦手意識であったために、限られた時間でそれを解消させることができないからだったと考えられる。この点にどう対処していくかが今後の課題となる。

注目に値するのは、「苦手」とする回答のうち、様々

(表3) 図画工作は「好き」「どちらかといえば好き」と回答した理由

	「好き」と回答した理由	「どちらかといえば好き」と回答した理由
授業内容 (表現・鑑賞)	絵を描いたり、作品を作ることが好きだから・デザインを考えることが好き・生活に役立つものがつくれる・いろいろな制作ができる・風景画を描くことが好きだったが、人物を描くことは苦手・家ではできないことができるから・最初は完成するかわからないようなものが、だんだん完成がみえてくるのがわくわくする・一つの作品が完成した時に達成感を得ることができる・やり方に縛られず自由にものをつくることができる・自分で考えたものがつくれるから・物を組み合わせる物を作るという行為が好き・何かを自分でイメージすることが好きだから・夢中になって取り組める授業であった・自分にしか作れないものが形として残る・友達の作品を見るのが好きだから・自分の考えを他人に見せることができるから・楽しいから・面白いと感じるから・一つの作業に没頭することが好きだから・自分の手で物をつくる喜びを感じることができる	絵を描いたり物をつくるのが好き・器用な方ではないが作品を作ることが好き・絵を描くのは苦手だけどモノを作るのが好き・得意ではないが、制作とかが好き・物をつくることは好きで工作全般楽しく行うことができる。しかし絵を描くことが苦手であるためとても好きとは言えない・分野によって好き嫌いが分かれる。糸鋸を使うのは好きだったが、版画とかは好きじゃなかった・何かを作ることは好きなのですが、「図画」の範囲の絵具を使用する絵が苦手なので、とても好きとまでは言えないが好きです・作ることや描くことは好きだが、何を描けばよいかかわからないことが多かった・木を切ったりすることは好きですが、絵の具を使って塗ったり描いたりするのが苦手です。センスだし自分の中で好きに描いても人それぞれ好みがあるので、なかなかほめられることもなく。でも楽しかった記憶はある・完成した作品をみて、達成感に浸れる・自分だけのオリジナルの作品を作ることができ、全員が同じ物をつくる必要がない・自分の好きなように描いたり作れる・あまり器用ではないので、なかなか思った通りにはいかなかった。しかしどんな作品にしようか考えるのが好きなので、どちらかといえば好きです・自分の感性を表現すればよいと、楽しみながら授業に取り組むことができた・どんな作品をつくるのか発想がうかんでいると、それを形にするのが嬉しくて楽しかった・小学校の頃、図画工作が楽しかったから・つくることが楽しい・創造力がつくから・自分の想像や工夫を活かしやすい教科だから・難しい勉強が中心ではなく、物作りが中心だから
授業時間や 教員の指導		絵を描くことは好きだが、時間制限があって、自分の思うところまで製作できなかったり、授業や先生によって「自由」といっておきながら、ある程度型が決まったりして不完全燃焼になることが多かった
評価	自分の作品が認められる嬉しさがある	
道具や材料	普段使わない物を使うことができる・ノートにペンで書くだけではなく、たくさんの道具を使って自分の作品を作ることがおもしろいから	
活動形態	体を使って実感できることが多く想像しやすくなる・他の教科よりも活動的だから	座学ではないから
その他	勉強というより遊びの気持ちでやっていたから・勉強の息抜きになる時間で楽しい時間を過ごせる	写生会で入賞したことがあるが大人になって絵を描く機会が減った・物を作ったり、考えたりすることは好きだけど、才能がない・一度スイッチが入れば作品作りにのめり込むが、スイッチがはいるまでに時間がかかる・いろんなアイデアが出てくるときは楽しく感じるけれど、なかなか楽しく感じないときもある・作品を作っている時間は色々な事を忘れて夢中になれる

アンケート結果に見る図画工作教育法の成果と課題

(表 4) 図画工作は「嫌い」「どちらかといえば嫌い」と回答した理由

	「嫌い」と回答した理由	「どちらかといえば嫌い」と回答した理由
授業内容 (表現・鑑賞)	もともと絵が苦手で、頭の中のイメージ通りに表現できなくて辛かった・絵を描くのは苦手、発想なんてできない・Artは納得できるものができたときは好きになる・何を作って良いのかわからなかった・不器用で人より上手にできなかった・細かい作業をするのは好きではなかった	絵が上手にかけなくて、他の人への劣等感で嫌になった・絵をかくことがあまり好きでない・絵がヘタとよく言われてやりたくなかった・小さい頃から絵心がありなくて、上手に描いたという達成感というものを得たことがない・自分には他人を驚かせるような作品は作れない・アイデアもわからないし、また他の子と比べて自分のできが悪く、恥ずかしい思いを何度もしたから・アイデアが毎回浮かばない・細かい作業が苦手、手先が不器用・何か作っても自分の思いどおりにならなくて嫌い・もともと絵が苦手で、手先も不器用で思ったように作品ができなかったから・工作があまり上手でなかったから・モノを作ることは好きだったが、不器用だったので、細かな所の製作が出来ずいつもモヤモヤしていたから・作品を上手に作るができないから・図工におけるセンスが無い・才能がないので好きになれない・やりたいと思ったことができない
授業時間や 教員の指導	終わらなかった作品がある場合、家に持ち帰って作業したり、居残りしなければならなかったから・時間も真面目に作るには短い、適当に過ごすには長い	いつも時間内に終わらず、家に持ち帰ったり、いのこりしたりして、それが苦痛だった・作業がとても遅くて、時間がかかり過ぎて未完成のまま作品を提出することが多くて苦手意識があるから
評価	センスで評価する項目があり、そこで評価を落とされやる気を無くす場合があるので・うまくできないから嫌になった・他の児童の作品が目に入り、自信をなくした	どのような作品を作っていたとしても、後々評価されると考えるとあまり図画工作に対して楽しく取り組んだことのある記憶がないから
その他	やっても楽しいと思えた記憶がない・木や冷水を使う時は、冬だと木は感想してカサカサ、気持ち悪いし、手はかじかむ。冬じゃなくてもあまり好きなことができない	

(表5)「図画工作は必要」と回答した理由

	理 由
創造力・想像力・ 発想力・人間性 など	創造力、発想力、表現力、想像力がつくから・創作、創造することは人を豊かにするから・何かを自由に生み出すというのは、図画工作でないと難しいのではないと思った・図画工作で育まれる創造力は、他の教科の基盤となり得るから・自由に自分を表現できる場、そのような力を育成する場であるから・必要な資質、能力であるから・物をつくる、創造する楽しみを知ってもらうため・子どもの想像力を活用させるため・想像力や創造力、発想力を養う科目は他にないから、やっぱり図画工作は必要・小学生という幼い頃に養わないと、想像力、柔軟な頭というのは育たなくなってしまうから・想像力を豊かにする、イメージを膨らませて表現するというのが、他の教科では難しいと思うから・心を豊かにする、感性や人間性などを育てることができる・大人になったら得られない感性を養う事ができる時間になるはずであるから絶対に必要である・造形遊びなど、体験や遊びを通して鑑賞、想像、試行錯誤することは他の教科では補えない。図工はその力を育てる要素があるから・個性を引き出す場であるから・図画工作の活動から子どもたちが成長できると考えるから・物を作るために思考を回すことで成長できるから
楽しさ・意欲	楽しいから・ものをつくることの楽しさや指先を使う力がつくから・ものを作る楽しさや喜びを味わうことができると思うから・図画工作の活動を通して、絵を描くことやものをつくることに興味をもつきっかけとなり、その意欲が他の教科の学習にもつながっていくから
表現やコミュニケーション	自分の考えや発想を普段しない方法で表現するのはとても面白く、見方や感じ方を広げられるから・普段自分のことをあまり表現できない子どもでも、図工の時間があることで堂々と表現することができるから・自分の考えを表現する場を設けることは、自分の形成につながると思うから・苦手な子はもちろんいるだろうけれど、児童の感情を先生が読み取る1つの方法になったり、児童が学校の中で自由に自分を表現できる少ない機会であったりするだろうから・自分を表現できるようになることは大切だから・現代文明、発達、情報伝達の多様性など、複雑多様化する社会に適応するために表現することは大切だから・表現力やイメージすることは、これからの社会において必要であり、身につける手だてとして図工は良い方法である・表現する力を養える場であるから・自分の中身を目に見えるように表現できる教科は他にないから・抽象的な表現を学んだ方がいいと思うから。例えば気持ちを表現する活動など・子どもの想像力は絶対に必要であり、他教科にも使える・班の人と交流が生まれ、コミュニケーション力が高まる・自分を表現するというのは、自分が思っていることを、考えていることを相手に伝えるのと一緒であり必要な力であるから・友人との協調性を養う事ができる小さいうちに、様々な材料にふれて自分を表現することを知っておくと良いから・感情等を表現しようとする能力が養われるから・自分を表す活動だから・なにもない所から形を作ったり表現したり、それらを伝え合ったりする能力が、日常生活の中でも必要な能力だと思っているから
教師と子ども	図画工作を通して、絵を描いたり、ものを作ることが好きな子どももいるだろうし、児童の気持ちや性格を知ることができる・図画工作には正解はなく、自由に表現ができるので、自分の感情の思うままに描くことができるとしています。小学校でそういった時間を設けることによって、児童が自己表現の楽しさ、大切さに気付くことができ、教師は児童の作品から心理状態が分かることがあるかもしれません。そういった面で図画工作は必要だと考えます
道具と材料・技術	触れることは大事と思うから・いろいろなものに触れられる良い機会、勉強ばかりだとつまらない・安全な用具の使い方が学べる・日常生活で必要となるスキル（ハサミの使い方、のこぎりの使い方）を身につける・図画工作での経験がその後の進路、生活に関わってくるかも知れないから・身近な材料の特徴や活用法を知ることができるため・小学生、中学生のうちに絵を描いたり、つくったりといったことをしないと、大人になって自由な発想が出来なかったり、デザイン（服とは家か）を決めるときに困るから・物を作る楽しさを児童に感じ取ってもらわないと、生産系の職業に対する意識が低くなってしまうため・創ることで生まれる心、絵を描くスキルが上達する・色や形にふれる機会である・手を使う運動になる
その他	物を作るという技術よりも、他に得られることが多くあるから・作品を作る上で、得られるものもあるから・学校以外ではなかなか取り組めない・人間味があるから

アンケート結果に見る図画工作教育法の成果と課題

(表6)「図画工作はどちらかという必要」と回答した理由

	理 由
創造力・想像力・ 発想力・人間性 など	創造力や想像力や表現力などを養うため
楽しさ・意欲	作品をつくることは楽しいという気持ちをあじわえる・工程が学ぶ楽しさにつながる
表現やコミュニケーション	言葉よりも絵の方が伝わりやすいことが多いから・学びを教えることも大切だが、自分の表現したいように表現させてほしいと思うから、そのための技術を使うのであれば必要
教師と子ども	絵は自分の心を写し出すと思うため、心の解放には良いと思う。だが無理にやりたくないことを強要するのは違うと思う
道具と材料・技術	いろいろな物に触れることは大切だから
評価	評価しないなら創造性が養われる・正解に固執する必要がないから
その他	将来そのような仕事に就きたいと思う人もいるから

(表7)「図画工作は必要ですか」についての回答（事前アンケート結果）

	理 由
創造力・想像力・ 発想力・人間性 など	創造力、発想力、想像力、感性を育成する・人間性の育成・試行錯誤して一生懸命に作る態度を身に着ける機会になる・図画工作で培われる創造力は、全ての学習の基盤となる・個性を発揮できる場である・図画工作で育成される、想像力や修得できる技術は将来役立つ・芸術作品に触れることで感受性が養われる・小学生の間にいろいろな体験をさせて子どもの可能性を増やすため・達成感を味わったり、次への反省をしてよりよいものをつくり出してもらいたい・鑑賞を通して視野をひろげる
表現やコミュニケーション	自由な表現ができる・自由に自分を表現できる唯一の教科・自分が想像するもの、頭に描いたものを形に表すことは難しいが、大人になってからもその能力は必要・自分自身を見つめ直したり、相手の考えを読み取る力を養うことができる・目標に向かって努力する力を育成・主体的に自分の考えを出せる科目
教師と子ども	教員にとっては、子どもを理解できる場でもある
道具と材料・技術	道具の使い方がわかる・家ではそういうことができない
評価	自分の作品を他人に褒められる喜びを味わえる
その他	ストレス発散・最低限の知識として持っているといい・生活に役立つ

な制作課題の中で、絵画を苦手とする回答が多いことである。絵画は静止平面上での時空間表現であり、日常での作業と大きく異なる抽象性を持つ技術を伴い、制作でも鑑賞でも長期間の訓練を要する。またその技術の歴史的な蓄積も大きい。その反面、絵が「うまい」ことはわかりやすく、できない学生は劣等感も抱きやすい。絵画制作の「じょうず」「へた」は、基本的に教え方、学び方や訓練に使う時間で解決できる表現技術の問題である。だが絵画表現の在り方に対する理解がないと、それが「センス」や「才能」の問題と考えられてしまいがちである。そのために

苦手意識を持つ学生は上達する見通しが得られず、図画工作教育に取り組む意欲を削がれてしまう。これらの点で、とくに絵画の教育が重要であることがわかる。図画工作教育法でもモダンテクニックのようなやさしく楽しい制作や、多様な制作テーマを体験させると同時に、絵画の苦手意識を克服する教育の仕方を工夫することで、すべての学生が図画工作教育の意義を認識できるようになると考えられる。

参考文献

文部科学省『小学校学習指導要領解説（平成29年告知）

図画工作編』日本文教出版 2018年

らのアプローチ』福村出版 2017年

長尾寛子『時空間表現としての絵画：制作学と美術教育か

受付日 2019年 9 月30日

受理日 2019年10月29日